

『至誠の日本インテリ ジェンス』を読んで

柴田 幹雄 陸自 75

産経新聞論説委員の岡部伸^{のぶ}氏が3人の陸軍軍人の情報活動について、美化することもなく、貶めることもなくその素晴らしい業績を後世に伝えたいという情熱で書き綴った本である。その3人とは、小野寺信^{まこと}陸軍少将、樋口季一郎陸軍中将そして藤原岩市陸軍中佐(階級は終戦時。藤原岩市は陸自に入隊し陸将で退官)である。

副題に「世界が称賛した帝国陸軍の奇跡」、帯には「最強の諜報^{インテリジェンス}は誠意!!」とある。諜報といえば人を欺き、裏切り、そしてえげつない工作をするというイメージもあるがこの3人はそこから対極にある誠意の人たちであった。当時通信傍受も公開情報収集もあるにせよ基本は人と人との接触で情報活動をするのであるから、確かに信頼関係が築けなければ情報など入手できず諜報もできなかっただろう。

現在、ロシアのウクライナ侵攻で

始まった戦いはハイブリッド戦であり、情報戦といえよう。必要な情報を収集しそれを的確に使用して世界を味方につけ、敵の弱点を拡大していく。それをリアルタイムで見ている。今こそ日本のインテリジェンスを強化すべき時と思うが、人の好い日本人にそれができるだろうか。その答えがこの本にあるように思う。

小野寺信少将

小野寺少佐は1935年、ロシア語の能力を買われて対ソ情報戦の最前線ラトビアの公使館付武官として赴任、バルト三国での活動を行った。その後参謀本部勤務などを経て、大佐に昇任した後の1941年、スウェーデン公使館付武官としてストックホルムに赴任した。小野寺は自分の情報活動をするに際しストックホルムで難民となっていたポーランド、エストニア、フィンランド、ハンガリーなどの小国の情報士官をしっかりと掌握していた。機密費で生活援助をしたり、家族ぐみの付き合いで信頼関係を強化していったのだ。小野寺の最大の情報提供者で生涯の友となる、ポーランドの大物情報士官ミハウ・リビコフ

スキーは、祖国を失った後、リトアニアの日本公使館の武官室にかくまわれ、のちにストックホルムの武官室で小野寺とともに仕事をしようになった。彼は欧州中に張り巡らした地下情報網から極めて貴重な情報を小野寺にもたらしている。例えば独ソ戦について、「退却しながらも降伏しない赤軍の想定外の強さに手を焼くドイツの脆さ」を伝えていたのだ。

連合国から「枢軸国側諜報網の機関長」と恐れられる存在になった小野寺は、「ドイツが日本に対して全面的に協力的でない」こと、「日本が対米英戦を開始するとすればそれはドイツの勝利を期待してのことだがそれは誤りである」ことなどの重要な情報を大本営に警告しているがなぜかすべて黙殺された。日本政府がドイツの戦局、情勢判断において重視したのは在ドイツ日本大使大島からの情報であった。大島はヒトラーから独ソ戦の見通しを直接告げられたいわばトップダウンの情報を送り、日本政府はこれに頼って方針を決めるため、小野寺からの情報は余計な雑音とみなされた。それでも、多くの重要情報を送

り続け、1941年12月、開戦直前にはあったがストックホルム発の緊急電「日米開戦絶対不可ナリ」が東京の参謀本部に届けられた。しかし日本が開戦を再考するには時すでに遅しであった。

小野寺は欧州情勢についての確な情報を多数報告している。ドイツがバトル・オブ・ブリテンに惨敗し制空権を失い英本土上陸作戦の兆候はないこと、ドイツがソ連へ奇襲侵攻すること、そしてドイツの敗北までつかみ報告していた。これらの情報は開戦前にもたらされているのだが日本はこれを生かすしきれなかった。

小野寺のすごさは「ソ連がドイツ降伏3ヵ月後に対日参戦する」いわゆるヤルタ密約まで会議直後に把握して打電していることからわかる。しかしこれもまたソ連に停戦の仲介を期待している動きから握りつぶされてしまった。

これらの貴重な情報は多くはリビコフスキーほかのポーランド情報士官からもたらされたものである。ポーランドは亡命政権をロンドンに置き、ドイツと戦っていた。日本はその同盟国であるにもかかわらず、彼らは重要情報を小野寺に渡してい

た。それは日露戦争で日本がロシアを破ったこと、日本軍がシベリアで、ポーランド孤児765名を助けて最終的にポーランドへ送り返した事など、彼らには日本への特別の感情があったのだが、最も大きかったのは小野寺の人間的魅力であった。二人の間には軍人として国を背負う者同士の友情と信頼があった。リビコフスキーはポーランド地下組織にも

かかわっており、ロンドンへも情報提供している。ドイツのゲシュタポは彼をつけまわし、拉致してベルリンへ連れ去ろうと狙っていたが小野寺は、最後まで彼を守り抜いた。

だがナチスからの圧力に抗しきれなかつたスウェーデンがリビコフスキーをベルソナノングラータに指定し、彼は国外退去となりロンドンに移ったが、なんとその後もロンドンから小野寺に情報提供を続けた。その最大のものがヤルタ密約の情報だったのだ。この情報が届いたのは当時米国副大統領であつたトルーマンが知るより早かつたという。

戦後も小野寺とリビコフスキーの友情は続き、「小野寺は私の命の恩人だ」という感謝の言葉を小野寺夫人にも述べている。

本書にはこのほかにも終戦工作にかかわつた活動の詳細や、リビコフスキーは二重スパイだったと捉えるべきなのかや、なぜ情報が生かされなかつたかといった話題も詳しく記述されている。

樋口季一郎中将

樋口季一郎中将については「偕行」

に何度か登場しているので読者の皆様にはなじみがあると思われる。筆者は占守島の防衛作戦、北海道をソ連から守つた英断の將軍という認識であつたが本書を読んでそれだけでなく、ユダヤ難民を救つた事実も大きく評価すべきであることをあらためて理解した。彼らはナチスの迫害を恐れ、ポーランド、ソ連と安住の地を求めて難民となつたが受け入れられず1938年3月、満洲国の手前、シベリア鉄道の終点オトポールで立ち往生してしまつた。3月はまだ酷寒の季節であり、救済が遅れば凍死者も続出しかねない状況であつた。だがドイツと同盟を結んだ日本に付度し、満洲国はビザを発給する気配がなかつた。満洲国は本来独立国であり、関東軍特務機関長の樋口にもビザ発給の権限はなかつた

が、関東軍は満洲国の市政全般への一般的指導権を持つていたため、ビザ発給に関与することができた。満洲国外交部の旧知の外交官下村信貞に「満洲国は独立国である。満洲国が関東軍に気を遣う必要もなく、ましてドイツに遠慮は無用であろう」と難民救済のためのビザ発給を進言した。下村も「人道上の問題である」として手続きを進めた。この時日独の關係は極めて良好であり樋口も陸軍内での失脚を覚悟しての行動であつた。そのうえで満鉄總裁松岡洋右に電話し、ユダヤ難民輸送の特別列車を仕立てるよう要請した。松岡は二つ返事で了解し、900キロメートルにわたる長距離離送列車を無料で運行させた。下村の努力で外交部は満洲国滞在ビザを発給した。これにより救われたユダヤ難民の数は約2万人で、杉浦千畝が発行する6000人の「命のビザ発給」に先立つこと2年であつた。

樋口中將の独断の「暴走」に対し、ドイツから日本政府に樋口の処分を要求する公式の抗議書が届けられた。ついには関東軍司令部から樋口中將に出頭命令が来た。呼び出したのは満洲国参謀本部参謀長の東條英

機中将であつた。陸士で4期先輩の東條に「ドイツのユダヤ人迫害は人道上の敵でありこれに協力すれば人倫の道に外れることになる」と述べ、「ヒトラーのお先棒を担いで弱い者いじめをすることが正しいことと思いませんか」と問うた。東條は樋口の言葉に耳を傾け、樋口の決断に理解を示し、懲罰を課すことはなかつた。樋口は参謀本部第二部(情報)長へ榮転し事件は沈静化した。

そもそも日本は米国の反対で実現しなかつたが国際連盟に人種差別撤廃提案をした国であり、満洲国は「五族協和」を合言葉にしている。大東亜戦争も自存自衛とともに欧米列強の植民地解放を理念として掲げており、当時の高級将校はこの大義名分については承知をしていたはずである。また、樋口は情報将校として多くの海外勤務を経験し、ポーランドやドイツにも赴任しユダヤ人をめぐむる問題に精通していた。樋口がワルシャワでの駐在武官であつたとき、住居を世話してくれたのはユダヤ人であつた。ワルシャワに駐在した海軍の米内光政や留学した百武晴吉に住居を提供したのもユダヤ人だつた。樋口はこの厚遇に対し「戦前の

欧州では、アジアの有色人種に対する差別があつて日本人が家を貸してもらえないことが多かつた。その時、家や下宿を世話してくれたのはユダヤ人だつた。だから恩返しをするのは当然である」と述べている。ナチスドイツがユダヤ人に迫害を始めてから米・英でも反ユダヤ主義が広がり世界全てがユダヤ人に扉を閉ざしていた中で日本だけがユダヤ難民を受け入れた事実は記憶されておくべきことだらう。

占守島での戦いについての記述もあるけれど、ここではひとつだけ紹介したい。8月18日のソ連軍の攻撃に際し、第5方面軍司令官だつた樋口中将は大本営にお伺いを立てることなく「断固反撃に転じ、ソ連軍を撃滅すべし」と打電し、現地の部隊は勇敢にこの自衛戦争を戦つた。これがスターリンの野望を挫き北海道占領をさせなかつたことにつながる。だが、なぜその決断ができたか。筆者が司令官ならどうするだろうか、天皇陛下の終戦の詔勅が出ていのになぜ断固反撃を決心できたのか、と考えることがある。ここで著者はヤルタ密約に関する小野寺情報

いかとしていいる。それは樋口のインテリジェンスオフィサーとしての蓄積と情報網があつたればこそその情報伝達であり、ソ連の北海道侵攻の意図を感知していたのではないか。だが情報は往々にして生かされてこなかつた。樋口中将が仮にその情報を得ていたとしても、軍人としての確たる使命感に基づく決断力を持つていたからこそできた決心であらう。

本書によれば、「樋口季一郎中将頭彰会」が今年22年の秋には出身地の淡路島と彼が守つた北海道に樋口中将の銅像を建立する予定で場所を検討中とある。頭彰会には22名のユダヤ人も発起人として名を連ね数千万円の寄付を募つていいる。戦後、軍服姿の銅像が建てられるのは初めてのことだという。

藤原岩市中佐

藤原岩市は、1908年兵庫県津

万村(現在の西脇市)で生まれ、陸士、陸大を経て、陸軍少佐で参謀本部作戦課へ行く予定であつたが、健康上の理由で謀略課に配属され、謀略・宣伝を担当することになった。緒戦のマレー作戦で中野学校を出身の約10名と特務機関、F機関を結

成した。マレー人匪賊の頭目ハリマオ(谷豊)を活用する「ハリマオ工作」などで現地住民の反英、対日協力醸成に成功してシンガポールを陥落させ、英軍からインド兵を投降させ、インド国民軍(INA)を創設し、独立運動の英雄スバス・チャンドラ・ボースと「アジア民族の自由自決の尊重」の精神でインドを独立させることで英国のアジア太平洋戦線からの離脱を狙つた。F機関のFは藤原の頭文字と自由「Free」をかけてい

る。藤原は現地での情報活動を通じて英国は現地住民に対し、絶対の優越感におごつて原住民に対する人間愛―愛の思いやりがないことを見抜いた。日本軍の攻撃でシンガポールが陥落した翌々日集められた5万人のインド兵捕虜は、藤原少佐の「日本軍はインド兵諸君を捕虜という觀念では見ていない。諸君らが自ら進んで祖国の開放と独立の闘いに忠誠を誓い、INAに参加を希望するならば、INAに参加を認め、全面的支援を与えんとするものである」というスピーチを聞いて狂喜歓呼したとい

う。これに応じたインド兵はINAの中核となり、やがてインド独立運動の巨魁、チャンドラ・ボースがそのトップの座に就いた。インパール作戦は、兵站無視の無謀な作戦、史上最悪の作戦などと言われ、作戦目標を達成できず膨大な損害を出してなすところなく失敗した好例のように言われている。作戦にあたり補給の困難さから日本軍の参謀の中からも否定的な意見は出ていた。作戦を担当した第15軍司令官牟田口廉也が無理やり強行したという見方があるが、それだけではなかつた。祖国解放を目指すチャンドラ・ボースは、INAをインパール作戦に参加させるようにたびたび要求した。このボースの熱情が、日本側に少なからぬ影響を与えたともいわれている。インパール作戦はインド・ビルマ国境の一角に突破口を作り、これを拠点としてインド独立運動を推進しようと思つたボースの宿望を實現するものでもあつた。INA約6000名は日本軍とともにインパール攻略を目指して戦つた。日本が支援したボースの積極的な武力闘争が後のインド独立の起爆材となつたという評価もできる。

述べている。

藤原中佐の娘婿で、元陸上幕僚長、

偕行社前理事長、東洋学園大学名誉

教授の富澤暉氏は「知識、技術を持

たない藤原は心の底から相手を考

え、魂だけで工作をやったのです。

戦後、義父は陸上自衛隊の調査学校

(現小平学校に統合)の学校長とな

り、情報関係の教育方針として『智・

魂・技』を掲げましたが、『『機関』

はまさに魂だけで成功させました』

と指摘した。

戦後、英国当局はIINA幹部に

なった軍人たちを反逆罪で裁判にか

けると、インド民衆の抗議運動が起

きた。兵士の反乱まで誘発して、英

国に植民地統治の継続が不可能であ

ることを悟らせた。この裁判の首席

弁護士を務めたパラバイ・デサイ博

士は、「IINA将兵はインド独立の

ために戦った愛国者であり、即時釈

放すべきだ」と強く主張した。さら

に「インドは間もなく独立する。こ

の独立の機会を与えてくれたのは日

本であり、そのおかげで独立が30年

早まった」と宣言した。

IINパール作戦が何も得るものな

く敗退したのではないと考えれば、

兵にとつてなにかの慰めになる
のではなからうか。

日本インテリジェンスについて

国連安保理の常任理事国で核保有

国でもあるロシアがウクライナのク

リミアへの巧妙な侵攻、さらにはウ

クライナ全土への全面侵攻を行った

ことで欧州はもとより、日本へも大

きなインパクトを与え、安全保障政

策、防衛態勢の根本的見直しを迫ら

れている。単に軍事力の態勢のみな

らず、経済安保、科学技術安保、そ

して情報に関する態勢見直しも待っ

たなしである。

現在のマスコミやネットにあふれ

るデータや画像、コメントなどは

情報戦の一環として、確たる意図を

もって発せられた情報であり、フェ

イクニュースも多分に交じってい

る。それが正しいのか、なぜ流れて

くるのかを一つ一つ吟味しながら理

解せねばならない。日本国家にはこ

のファクトチェックをする機能すら

持っていない。情報収集も各省庁が

それぞれの縦割りの行政事務に必要

な情報を収集しているに過ぎない。

これを一元的に総合し、分析、蓄積、

であるう。

日本には日本の伝統的情報活動の

歴史と蓄積がある。本書を読めば日

本人のまじめで誠実な倫理観で情報

戦を戦うことは他国ではできない成

果を上げることがわかる。日本も

自信を持つて情報戦に勝てる法体系

と組織を整備し、そしてこれを支え

る予算を十分に投下することが、次

の国難への最大の防衛になる。

また本書を読んで強く感じたこと

をもう一つ。それは近現代史の教科

書に是非この3人を載せてその業績

と人となりを見せられて教えるはし

いということである。1990年代

あたりから日本の衰退がはじまった

が、陸士海兵出身者や戦争経験のあ

る世代が社会の第一線を退き、戦後

教育世代へバトンタッチをした時期

に重なるのはたまたまであろうか。

他人のため、国のために誠心誠意努

力すること、リーダーとしての責任

感、倫理観を大事に生きることの価

値をあまりにもないがしろにしてい

るからではないか。そういったこと

を正面からでなく、こういう偉人の

伝記を教育することで教えていき

いものである。そのような視点から

IINパールから南へ45キロ、マ

ニブル州モランには、侵攻した

IINAが1944年4月14日、最

初にインド独立の象徴である三色旗

を掲揚したことを記念したIINA戦

争博物館、通称ボース博物館がある。

ボースの銅像やIINAに関わる展示

物や説明があるいわばIINAの聖地

である。注目すべきはそこに「194

2年にマレーでIINAを創設した日

本陸軍の機関長」として藤原岩市中

佐の功績をたたえて、彼の肖像写真

が展示されていることである。大東

亜会議の写真もあり、そこを訪れた

著者は日本人として誇らしい気持ち

になったと書いている。

藤原岩市は情報活動の経験もな

く、外国語も不十分で、少佐で活動

開始したにもかかわらず大きな成果

を上げた。なぜそこまでインド人の

心をつかんだのか。

戦後英国の情報関係の大佐から、

なぜうまくいったのか問われたと

き、「特別のテクニクなどない。

あなた方の植民地運営は現地住民の

意向を無視したものだ。だから搾取

から逃れ、自由と独立という彼らの

悲願達成を至誠と愛情、情熱で手

述べている。

藤原中佐の娘婿で、元陸上幕僚長、

偕行社前理事長、東洋学園大学名誉

教授の富澤暉氏は「知識、技術を持

たない藤原は心の底から相手を考

え、魂だけで工作をやったのです。

戦後、義父は陸上自衛隊の調査学校

(現小平学校に統合)の学校長とな

り、情報関係の教育方針として『智・

魂・技』を掲げましたが、『『機関』

はまさに魂だけで成功させました』

と指摘した。

戦後、英国当局はIINA幹部に

なった軍人たちを反逆罪で裁判にか

けると、インド民衆の抗議運動が起

きた。兵士の反乱まで誘発して、英

国に植民地統治の継続が不可能であ

ることを悟らせた。この裁判の首席

弁護士を務めたパラバイ・デサイ博

士は、「IINA将兵はインド独立の

ために戦った愛国者であり、即時釈

放すべきだ」と強く主張した。さら

に「インドは間もなく独立する。こ

の独立の機会を与えてくれたのは日

本であり、そのおかげで独立が30年

早まった」と宣言した。

IINパール作戦が何も得るものな

く敗退したのではないと考えれば、

兵にとつてなにかの慰めになる
のではなからうか。

日本インテリジェンスについて

国連安保理の常任理事国で核保有

国でもあるロシアがウクライナのク

リミアへの巧妙な侵攻、さらにはウ

クライナ全土への全面侵攻を行った

ことで欧州はもとより、日本へも大

きなインパクトを与え、安全保障政

策、防衛態勢の根本的見直しを迫ら

れている。単に軍事力の態勢のみな

らず、経済安保、科学技術安保、そ

して情報に関する態勢見直しも待っ

たなしである。

現在のマスコミやネットにあふれ

るデータや画像、コメントなどは

情報戦の一環として、確たる意図を

もって発せられた情報であり、フェ

イクニュースも多分に交じってい

る。それが正しいのか、なぜ流れて

くるのかを一つ一つ吟味しながら理

解せねばならない。日本国家にはこ

のファクトチェックをする機能すら

持っていない。情報収集も各省庁が

それぞれの縦割りの行政事務に必要

な情報を収集しているに過ぎない。

これを一元的に総合し、分析、蓄積、

活用する国家の情報機関を作るべき

であるう。

日本には日本の伝統的情報活動の

歴史と蓄積がある。本書を読めば日

本人のまじめで誠実な倫理観で情報

戦を戦うことは他国ではできない成

果を上げることがわかる。日本も

自信を持つて情報戦に勝てる法体系

と組織を整備し、そしてこれを支え

る予算を十分に投下することが、次

の国難への最大の防衛になる。

また本書を読んで強く感じたこと

をもう一つ。それは近現代史の教科

書に是非この3人を載せてその業績

と人となりを見せられて教えるはし

いということである。1990年代

あたりから日本の衰退がはじまった

が、陸士海兵出身者や戦争経験のあ

る世代が社会の第一線を退き、戦後

教育世代へバトンタッチをした時期

に重なるのはたまたまであろうか。

他人のため、国のために誠心誠意努

力すること、リーダーとしての責任

感、倫理観を大事に生きることの価

値をあまりにもないがしろにしてい

るからではないか。そういったこと

を正面からでなく、こういう偉人の

伝記を教育することで教えていき

いものである。そのような視点から